

# X. 大東亜戦争と死の文学

## X-1 保田與重郎と小林秀雄——戦争イデオログ

**小林秀雄** (1902~1983) ……東京市神田区生。近代日本文芸評論の確立者。戦後は坂口安吾による「教祖」批判。

**保田與重郎** (1910~1981) ……奈良県桜井市生。1935年創刊の『日本浪漫派』を主催。当時の青年層に絶大な影響を与えた。詩によって神国日本の戦争を賛美し、若者の玉砕を奨励し、死を美しい言葉で飾って事実の醜悪さを隠した。それは当時を知る戦後の若者たちにとっては、「奇怪な悪夢」であり「錯乱の記憶」であり「おぞましい神がかりの現象」(橋川文三)であり、あるいは「不気味な神話」(三島由紀夫)であり、「海中深く廃棄された放射性物質」(大岡信)であった。

- 昭和十年代という「不安の時代」。近代的な「知」に対する反抗。文学は反知性主義のよりどころとなった。  
Cf. 橋川文三「日本浪漫派批判序説」  
反知性主義の浸潤…その傾向の典型的代表者を小林秀雄とすることは間違いでないであろう。
- 小林と保田はもっとも成功した「戦争イデオログ」とされる。1920年代生まれの学生を魅了していた。

### ◆ 近代文学者の自然／革命観——言霊と直毘霊

【保田與重郎】「戴冠詩人の御一人者」1938年

本居宣長は上代日本人の「自然観」を明らかにすることに生涯を費やした。〔富士谷〕御杖がその見解に反対し、如何にも粗放めかしいところを訂正した。…さういふ「自然」の中に見出されたものが、神の血統の自然としての順序であり、人為の政治的秩序ではない。宣長の中世以降排斥の説には、かつて以上な憧憬の現れとしての上代の自然観を見てみたのであつた。その自然観があつた。日常の言葉としての「自然」を以て、泰西近世の「自然に還れ」と語呂合せ的に解釈してはならない。その注意はけふの科学的精神の精密の誇りのために必要である。「自然」を具体的に云へば、同殿共床である。

- 「日本武尊の悲劇の中の伊吹山の物語の構想の中心をなすものは言霊信仰である」として、神の自然と人間の言葉を一致させる「言霊」(富士谷御杖)に注目。「自然＝同殿共床」とは、神武期の人々の憧憬。
- 神武以前の世界を言霊とみる御杖の世界観(⇔神武以前をすべて現実とみなした宣長の「直毘霊」)。
- 日本武尊に英雄的理想を見いだす保田は、すでに世界を滅びのうちにみている(敗北者の美)。重要なことは、決着＝現実ではなく、戦うことそのもの。決着を度外視するという点で、それは言語的なもの。

日本は今未曾有の偉大な時期に臨んでゐる。それは伝統と変革が共存し同一である稀有の瞬間である。日本は古の父祖の神話を新しい現前の実在とし有史の理念をその世界史的結構に於て表現しつゝ行為し始めたのである。…戦争は一箇の叙事詩である。恋愛は叙事詩でなく抒情詩の一つである。この時期に我らは物語小説と詩文学を区別する。今は英雄が各個人の心に甦り、個人が国民と英雄を意識し、己の中にみいだす日である。英雄とは歴史の抒情に他ならない、人間の抒情がまさに詩人であつたやうに、意志と精神の決意は一つの抒情を歌ひあげる。

- 自然的抒情(韻文)と英雄的叙事(散文)の弁証法抜き統合、あるいは伝統と変革のつくる円環。

【小林秀雄】「文学と自分」1940年

文学者が文章といふものを大切にするといふ意味は、考える事と書く事との間に何んの区別もないと信ずる、さういふ意味なのであります。…海とか空とかいふ言葉は、悟性の約束による記号ではない、海や空といふ実物に繋り、海の匂いも空の色も映してゐる。善とか悪

とかいふ意味だけで出来てゐる様な言葉にしても、文学者は、長い人間の歴史の脂や汗に塗れているそいふ言葉の形をしかと感じてゐるのであつて、歴史の脂や汗を拭き去つて了つたら言葉はもはや言葉ではなくなる、それはただ推理の具と化するのであります。…**文学者の覚悟とは、自分を支へてゐるものは、まさしく自然であり、或は歴史とか伝統とか呼ぶ第二の自然であつて、自然を宰領するとみえる**の様な観念でも思想でもないといふ徹底した自覚に他ならぬ事がお解りだらうと思ふ。これは一方から言へば自然や歴史を心を虚しくして受容する覚悟とも言へるのである。

- 神＝自然をわれわれは受け容れることしかできない。言葉は人間の深奥にある神の作用にほかならない(と信じる覚悟を文学者もつ)。のちの大著『本居宣長』に結晶する言語観(直毘霊)。

僕らには歴史を模倣する事以外には何も出来る筈はない。刻々に変る歴史の流れを、虚心に受け納れて、その歴史のなかに己れの顔を見ろといふのが正しいのである。日本の歴史が今こんな形になつて皆が大変心配してゐる。さういふ時、果して日本は正義の戦をしてゐるのかといふ様な考へを抱く者は歴史について何も知らぬ人でありませう。歴史を審判する歴史から離れた正義とは一体何んですか。空想の生んだ鬼であります。

- 戦争は道徳を超えた場所にある。聖戦などというイデオロギーは、歴史の前では歯が立たぬ。ひとは勝敗抜ききの戦争の歴史を、**沈黙のうちに**受け容れるほかない。指令者アマテラスの背後で作用している高御産巢日＝自然の作用。
- 小林は敗北によつても失われぬ過酷な自然を、日本人のうちに見定めようとしている(善悪の彼岸)。

国民は黙つて事変に処した。黙つて処したといふ事が事変の特色である、と僕は嘗て書いた事がある。今でもさう思つてゐる。事に當つて適確有効に処してゐるこの国民の智慧は、未だ新しい思想表現をとるに至つてゐないのである。何故かといふと、さういふ智慧は、事変の新しさ、困難さに全身を以て即してゐて、思ひ附きの表現など取る暇がないからだ。この智慧を現代の諸風景のうちに嗅ぎ分ける仕事、批評家としての僕には快い。あとは皆んな語らぬ。

小林秀雄「疑惑Ⅱ」1939年

- 国民＝民族は不滅。**民族は滅びない。死の能力を欠く。**たとえ天皇制が終幕を迎えたとしても。
- 保田の絶唱と小林の沈黙、一見正反対にみえても、その差は微妙なもの。いずれも、文学者の覚悟が見出した、文化的なものを影で支え、ときに活力を与え、ときに破壊する自然＝歴史あつてのもの。
- インテリゲンチヤの喧騒の背後で、国民が沈黙のうちに実践する無意識の戦争(事変)にまで、天皇が根を下ろしているとしたら? ——いつかの敗北で失われるようなものではけつてない。

## X-2 かけがえのなさ

神こゝに 敗れたまひぬ。しづかなる青垣／山も よるところなき  
國びとの思ひし神は、大空を行く飛行機と／おほく違はず  
信薄き人に向ひて 恥ぢざるむ。敗れても／神はなほ まつるべき

折口信夫「神 やぶれたまふ」『近代悲傷集』1952年

- 国民の信じていた神は、いつのまにか、大地を離れ、飛行機と変わらぬものになつてしまつた。地上の破壊を破壊とも思わず過ぎていく、地上に場をもたぬ、ジュラルミンの翼をもつた、飛行機としての神。
- 折口信夫にとって、《神》とは?

神こゝに 敗れたまひぬ。

すさのをも おほくにぬしも／青垣うちの内の御庭の／宮出でゝ さすらひたまふ—。  
くそタグリ 嘔吐 ゆまり流れて／蛆ハヘ 蠅タカの 集りムラダ 群立つ  
直土ヒタツチに一人は臥コい伏フし／青人草アヲヒトグサ すべて色なし—

- 折口にとっての神は、大地に根ざす、スサノヲやオオグニヌシ。
- 天皇と「系図のつながる神」であるアマテラスの君臨する高天原を他界とする見解を批判。「国家以前」の日本人の生活する《大地》として、海を重視。

……日本人の場合、海を背景とする地域に長く住み、其後も又、ある部分は、海的生活を続けたのだから「海」に他界がないとすることは、我々の探らうと思はぬ方法である。其と同時に、海を離れて山野に住んだ時期の伝承ばかりを持つと思はれる日本人だから、高天原他界説が正しいと言ふのも、単に直感にのみ拠つてゐないだけに信じたい気が深く動くが、此とて日本国家以前・日本来住以前の我等の祖先の生活を思ふと、簡単に肯ふことは出来ない。

折口「民族史観における他界観念」1952年

Cf. 柳田國男の他界観（「先祖の話」、「魂の行くえ」）

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、おそらくは世の始めから、少なくとも今日まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

……死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の山の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉とを顧念しているものと考えだしたことは、いつの世の文化の所産であるかは知らず、限りもなくなつかしいことである。

## ● 未成霊

沖縄の神道では、「三十三年にして神を生ず」と言つて、死人は此だけの年月がたつと、神化するものと見てゐた。年月に異動はあつても、日本近代の民俗では、やはり亡者を何時までも宙有に迷つてゐなければならぬものとしてゐた訣ではない。僧家の手に管理を委ねた亡霊の中、実は年既既に到つたものすら、永久と言ふ長い時に涉つて、成仏の時の到り難いものがあつた。其をつい失念して、一度死んだ人間は、永へに仏の栄光に預り、仏性を得ることが出来ぬものゝやうに考へてしまつたものである。此は実は供養に廻向に礼を尽す情熱が、そんな風に、いつまで経つても、善き児孫の心に甘え、其を脱して独立の光明世界に生じようと思ふ風にならぬと言ふ風に思ひ違ひをさせたのであらう。此は我々民族の持つ迂遠なる循環性と、僧侶たちの仏教が、いつまでも儀礼を脱却することに努めなかつた為でもある。

折口信夫「民族史観における他界観念」1952年

- 戦後、遠い海の果てに散った若者たちをいかに弔うかを重要な主題に。近代化された靖国神社はもちろんのこと、死者は祖国を離れないとみた柳田の視座では不十分。
- 若者＝未熟な魂（「未成霊」。「完成霊」ではない）。本来、未熟な魂はこの世に念を残して成仏できない。明治神道・靖国神社においては、死ねば即神に。

未成霊の所在は、何処と考へたものか。此も明らかではないが、推察の論理だけは辿られさうである。…若者＝未成年である間に死んだものは一先に述べた浄罪所一煉獄のやうな所にゐることになつて居るらしいが、近代では未婚者を以て、若者・未成年者などのすべ

てを表示するが故に、未婚の児女は…賽ノ河原に集り、石の塔を積むと言ふ。

「民族史観における世界観念」

- 室町時代に生まれた賽の河原信仰。幼子が石積みをし、鬼に虐められているという。夭折した幼子や早世した青少年は家や集落の共同の墓地には埋葬されずに、集落の境界、村境に葬られた。寿命を全うしなかったものであり、いち早い再生・生まれ変わりを願っただろうが、逆縁であるために、成仏できない不浄の霊であり、邪霊となって災いをもたらすことを恐れられもした。

## ◆ 折口春洋の死

我どちにかゝはりもなきたゝかひを 悔いなげゝども、子はそこに死ぬ  
たゝかひに果てにし子ゆゑ、身に沁みて ことしの桜 あはれ 散りゆく  
たゝかひに死にしわが子の 果てのさま一委曲に思へ。昔き最期を  
戦ひにはてし我が子のかなしみに、国亡ぶるを おほよそ見つ  
愚痴蒙昧の民として 我を哭かしめよ。あまり惨く 死にしわが子ぞ  
いぎどほろしく 我がある時に、おどろしく雨は来たれり。わが子の声か

『倭おぐな』

- 大東亜共栄圏の夢ははかなく潰えた。
- 硫黄島で死んだ養嗣子、春洋（旧姓藤井）を悼んで詠まれた歌。

## 【念仏踊り】

念仏踊りは、大体二通りあつて、中には盆踊り化する途に立つてゐるものがある。だが其何れが古いか新しいかではなく、念仏踊りの中に、色々な姿で、祖霊・未成霊・無縁霊の信仰が現れてゐることを知る。墓山から練り出して来るのは、祖先聖霊が、子孫の村に出現する形で、他界神の来訪の印象を、やはりはつきりと留めてゐる。……一方、古戦場における念仏踊りは、念仏踊りそのものゝ意義から言へば、無縁亡霊を象徴する所の集団舞踊だが、未成霊の為に行はれる修練行だと言へぬこともない。なぜなら、盆行事（又は獅子踊）の中心となるものに二つあつて、才芸（音頭）又は新発意と言ふ名で表してゐる。新発意は先達の指導を受ける後達の代表者で、未完成の青年の鍛錬せられる過程を示す。……このやうに、魂の完成は、死者の上のみ望まれたことではなく、生者にも、十分行はれてゐなければならぬことであつた。生前における修練が、死後に成果を発するものと考へられて来る。

「民族史観における世界観念」

- 未熟なうちに非業の死を遂げた若者たちへの、折口の切なる願い。
- 本来なら、万人から祝福されて祖裔の連鎖に組み込まれるべき、本質からして美しい、すべての若者のうちの幾人かが、時代や社会の都合により、あるいは自然の気まぐれにより、連鎖からはじかれ、成熟を迎えることなく死んで、魂の行き場所を失ってしまう。そんなあわれな若者に対して、この世の内部に《場》を与え、現世の神にしようとするのは誰なのか。それは、この世に残された者の、過剰な同情。そもそも神といい霊魂といい、それらは、残された生者による、死者への同情が生み出す幻影。
- その同情が深ければ深いほど——折口の春洋に対する愛がそうであるように——、霊魂は成仏できずにこの世に《場》を得て——たとえば山に——現前し、あわれな霊魂は厳しい修練を課され、あるいは恐ろしい祟り神にされ、さもなければいつまでも護国の重責を背負わされることになる。
- あわれな未成霊。未成霊は、生物学的には死んでいても、生者の同情によって、社会的な**死の能力**を欠いている。

### X-3 自由の彼方

空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人が云つた事は確かです。操縦桿を採る器械、人格もなく感情もなく勿論理性もなく、只敵の航空母艦に向つて吸ひつく磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。……

飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、一旦下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり、熱情も動きます。愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的に死んで居りました。天国に待ちある人、天国に於て彼女と会へると思ふと死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。明日は出撃です。過激に互り、勿論発表すべき事ではありませんでしたが、偽はらぬ心境は以上述べた如くです。何も系統だてず思つた尽を雑然と述べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去つて行きます。

……

上原良司。特攻隊員として沖縄にて戦死。二二歳。『きけわだつみのこえ』一九五二年。

娑婆よりの最後のおとづれを書かうとしてペンを執つたが、千万言胸に溢れて言葉を知らない。君の手紙や電報は四日、香椎<sup>かしい</sup>に帰つてから見た。二十八日の夜香椎駅の夕闇をすかして私を探した君の姿を思ひ浮べて誠にすまないと思ふ。

君は煙の浜や新宮の浜の様な美しい砂浜にどこまでも続いてゐる足跡を見た事があるだらう。藤村か誰かの詩にそんな光景を歌つたのがあつた様に思ふ。私はそこに交り合つた数条の足跡が我々であつた様に思ふ。どこに始つてどこに終るかもしれない。どこに交つてどこに別れるかも知れない。そこはかとなく悲しいものは浜辺の足跡である。

浪に消される痕であつても、足跡の主の力づよい一足一足が覗かれる。もり上つた砂あとに立去つた人の遅ましい歩みを知る時、私は力づけられる。誠に我々は過去を知らず、未来を知らない。然し現在に厳然と立つ時、脚に籠る力を知る。

中尾武徳。神風特攻隊員として南太平洋で戦死。二二歳。

- 折口には耐えられなかった、あまりにあわれな、最前線の死。それは、名ある者のみ許された存在のかけがえのなさ、という、前近代的固定観念を動揺させる。数ならぬ身、不死であるはずの民衆が、死の能力を獲得する——そのプロセスこそ、大東亜戦争だった。
- 民衆が死の能力をもつ、そのことが、ほんとうの意味での民主主義を可能にする。